令和５年度教育研究発表会　社会科

新潟市立鳥屋野小学校　梶山　雄太(平成２８年度)

【研究主題】社会的事象について実感を伴った理解を促す授業
～社会科の学習を楽しむ子どもを目指して～

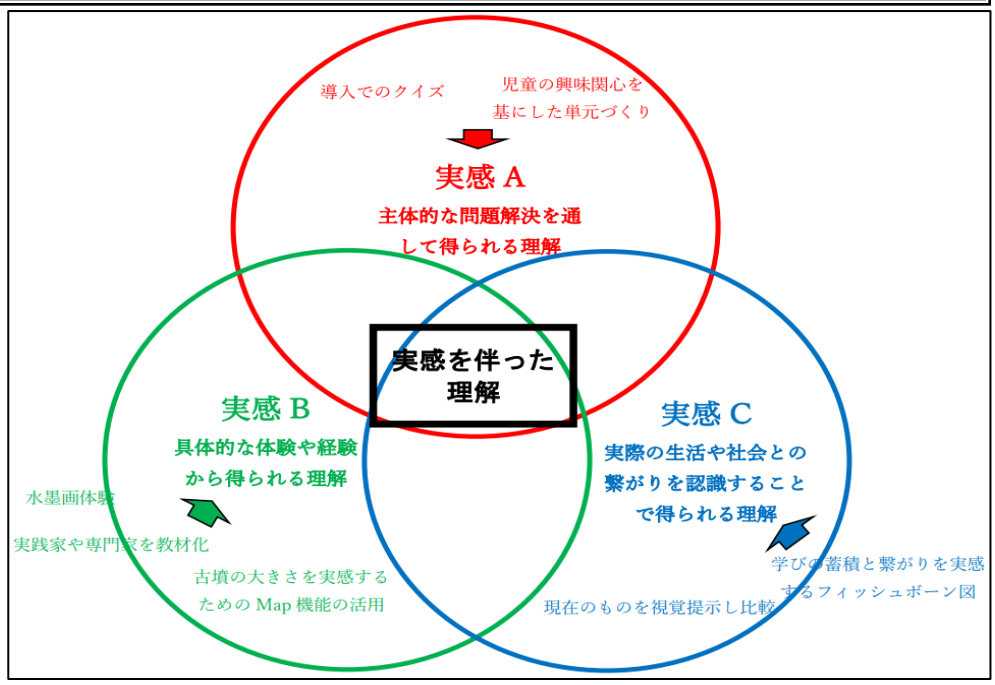
【主張】

私は，社会科の学習を楽しむ児童を増やしたいと思っている。そのためには，社会的事象について「実感を伴った理解」をできるようにすることが重要であると考える。なぜなら，社会科が楽しくないと感じている児童を分析すると，学習を理解できていなかったり，勉強する意味を感じなかったりしていることが分かったからだ。

そこで本研究では，社会的事象について「実感を伴った理解」を促すことを目指すことにした。社会科における「実感を伴った理解」とは，小学校学習指導要領理科にあった「実感を伴った理解」を参考に下図のように定義した。さらに実感 ABC の全てを満たした状態を「実感を伴った理解」とした。実感 ABC の三つを全て満たすための手立てを講じることで，「実感を伴った理解」を促し，その結果として児童が社会科の学習を楽しいと感じることができると考えた。

１　研究主題設定の理由

令和４年４月，本学級３２名にアンケートをとったところ，「社会科の授業は楽しくない」と答えた児童が５７％だった。その理由として「学習が理解できない」が２６％，「勉強する意味を感じられない」が１５％だった。そこで，児童が学習を通して右図のような「実感を伴った理解」をできるようにすることが重要だと考えた。



２　研究仮説

実感 ABC の全てを満たす理解＝「実感を伴った理解」ができた児童は，社会科の学習を楽しいと感じるようになるだろう。

３　検証の内容と方法

主に児童の振り返りの記述，単元末テストの結果(知・技８５以上)，事後アンケートで検証を行う。

※同一学級の児童を対象とし，５年生，６年生と２年間継続して研究を行った。

４　研究の実際

実践１　５年生　「これからの食料生産」(全８時間)　　令和４年度５年４組３２名
ねらい：地元生産者を教材に，食料生産の課題やこれからの食料生産の在り方について考える

（１）　実践１の手立て

実感 A を促す手立て：児童の興味関心を基にした単元づくり
目指す姿：自分たちの疑問解決に向けて主体的に取り組む姿

児童の興味関心を基に単元づくりを行うために，単元開始前にレディネスアンケートを実施した。

実感Ｂを促す手立て：従事する人の教材化
目指す姿：具体的な体験(食べる)や経験(人に触れる)を通して理解を深める姿
　具体的な経験や人から学ぶために，坂井ファームクリエイト(株)の坂井涼子さんの小松菜生産を教材化し，インタビュー調査やゲストティーチャーとして活用した。

実感Ｃを促す手立て：単元を通したフィッシュボーン図の活用
目指す姿：学びをまとめていく過程で学習が繋がり，生活に生かそうとする姿
　授業で獲得した知識を蓄積，繋げていくために，フィッシュボーン図を活用した。

（２）　実践１の結果

結果：実感Ａ…25 名　実感Ｂ…27 名　実感Ｃ…27 名⇒「実感を伴った理解」ができた児童…24 名
「実感を伴った理解」ができた児童のうち 20 名が「社会科が楽しい」と回答

実践２　５年生　「情報を伝える人々とわたしたち」(全８時間)　　令和４年度５年４組３２名
ねらい：地元アナウンサーを教材に，情報産業の働きや生活とのかかわりについて考える

（１）　実践２の手立て

実感Ａを促す手立て：児童の興味関心を基にした単元づくり
目指す姿：自分たちの疑問解決に向けて主体的に取り組む姿
　実践２では，単元１時間目末にレディネスアンケートを実施することで学習の見通しをもった中で実施することにした。

実感Ｂを促す手立て：従事する人の教材化
目指す姿：具体的な体験や経験(人に触れる，実際に聞く)を通して理解を深める姿
　具体的な人や経験から学ぶために，BSN アナウンサーである大塩綾子さんを教材化し，インタビュー調査やゲストティーチャーとして活用した。

実感Ｃを促す手立て：単元を通したフィッシュボーン図の活用
目指す姿：学びをまとめていく過程で学習が繋がり，生活に生かそうとする姿
　実践２では，フィッシュボーン図を児童主体で使えるように，自由に使用させた。

（２）　実践２の結果

結果：実感Ａ…25 名　実感Ｂ…28 名　実感Ｃ…29 名⇒「実感を伴った理解」ができた児童…25 名
「実感を伴った理解」ができた児童のうち 20 名が「社会科が楽しい」と回答

【実践１・２から】
・実感Ａについて，学習対象になる社会的事象について明確に興味や関心をもつことが大切だと分かった。また，実感Ａが不足することが多いことが分かった。
・実感Ｂについて，具体的な体験や経験(食べる，人から直接聞くなど)は全員が同じようにするが，実感Ａが得られていないと実感Ｂも得にくいことが分かった。
・実感Ｃについて，児童の生活や経験に直接つながる資料や発問が必要だと分かった。

⇒実践３，４では歴史分野で手立てを改善し実践を行った。

実践３　６年生　「国づくりへの歩み」(全８時間)　　令和５年度６年４組３２名
ねらい：古墳について調べることで，豪族を中心に国が統一されていったことが分かる

（１）　実践３の手立て

実感Ａを促す手立て：歴史的事象と身近なものとの比較クイズ
目指す姿：古墳について興味関心をもち，調べたいという気持ちが高まっている姿
　古墳についての興味関心を高めるために，大仙古墳の大きさをビッグスワンとの比較でクイズにした。

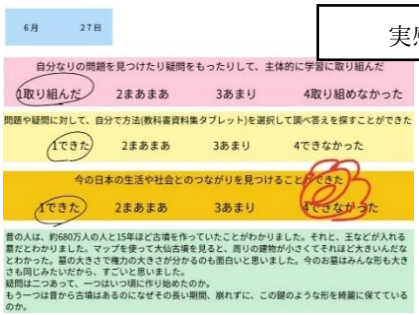
実感Ｂを促す手立て：Map を活用した実物調査
目指す姿：Map 機能で周りの建物と比較することで大きさを実感する姿
　大仙古墳の大きさを感じることができるようにするために，タブレットの Map 機能を用いて周りの建物と比較させた。

実感Ｃを促す手立て：現在の墓の写真提示と共通点を問う発問
目指す姿：現在のお墓の写真を提示して共通点を探すことで，現在との繋がりを実感する姿
　古墳と現在のお墓の繋がりを感じることができるようにするために，現在のお墓の写真を提示し，「今と変わらないことは何？」と発問した。

（２） 実践３の結果と課題

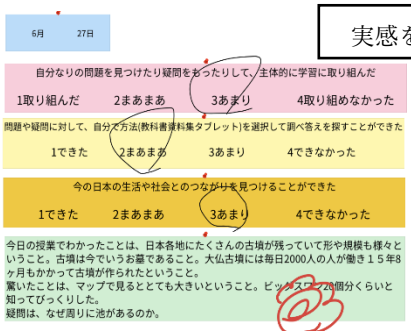
結果：実感Ａ…27 名　実感Ｂ…29 名　実感Ｃ…28 名⇒「実感を伴った理解」ができた児童…26 名
「実感を伴った理解」ができた児童のうち 24 名が「社会科が楽しい」と回答

実感を伴った理解ができた児童①の振り返りから


6月　27日
自分なりの問題を見つけたり疑問をもったりして、主体的に学習に取り組んだ
1取り組んだ　2まあまあ　3あまり　4取り組めなかった
問題や疑問に対して、自分で方法(教科書資料集タブレット)を選択して調べ答えを探すことができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった
今の日本の生活や社会とのつながりを見つけることができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった
昔の人は、約680万人の人と15年ほど古墳を作っていたことがわかりました。それと、王などが入れる墓だとわかりました。マップを使って大仙古墳を見ると、周りの建物が小さくてそれほど大きいんだなとわかった。墓の大きさで権力の大きさが分かるのも面白いと思いました。今のお墓はみんな形も大きさも同じみたいだから、すごいと思いました。
疑問は二つあって、一つはいつ頃に作り始めたのか。
もう一つは昔から古墳はあるのになぜその長い期間、崩れずに、この鍵のような形を綺麗に保てているのか。

実感Ａを得られた要因として，児童にとって身近なビッグスワンのフィールドとの比較で大きさクイズを行ったことが考えられる。ビッグスワンは運動会で毎年利用しているため，児童にとってはイメージしやすい材料である。身近なものとの大きさ比較を通して，古墳という遠い社会的事象に対しても興味関心を高めることができ，意欲をもって調べ活動に取り組むことができていた。

実感を伴った理解ができなかった児童②の振り返りから


6月　27日
自分なりの問題を見つけたり疑問をもったりして、主体的に学習に取り組んだ
1取り組んだ　2まあまあ　3あまり　4取り組めなかった
問題や疑問に対して、自分で方法(教科書資料集タブレット)を選択して調べ答えを探すことができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった
今の日本の生活や社会とのつながりを見つけることができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった
今日の授業でわかったことは、日本各地にたくさんの古墳が残っていて形や規模も様々ということ。古墳は今でいうお墓であること。大仙古墳には毎日2000人の人が働き１５年8ヶ月もかかって古墳が作られたということ。
驚いたことは、マップで見るととても大きいということ。ビッグスワン20個分くらいと知ってびっくりした。
疑問は、なぜ周りに池があるのか。

実感Ａとｃが不足した児童の振り返りである。実感Ａが不足した要因として，クイズの中身がこの児童には適さなかったことが考えられる。この児童はイメージすることが苦手な児童である。本時では大仙古墳の大きさをビッグスワンのフィールド何個分かというクイズにしたため，この児童にとっては取り掛かりにくいクイズだったことが考えられる。クイズの内容について吟味していく必要がある。
　実感Ｃについては，実感Ａが得られなかったことによって，今との繋がりも感じにくかったのではないかと考える。

実践４　６年生　「室町文化と力をつけた人々」（全５時間）　　令和５年度６年４組３２名
ねらい：室町時代の文化を調べることで，その特徴や今日に繋がる文化が生まれたことを知る

（１） 実践４の手立て

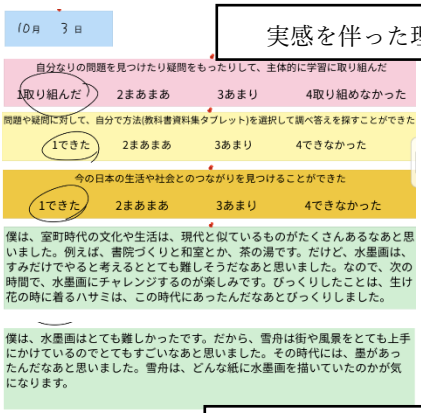
実感Ａを促す手立て：歴史的事象と身近なものとの比較クイズ
目指す姿：室町時代の生活や文化に興味をもち，調べたいという気持ちが高まっている姿
　室町時代の生活や文化に興味をもつことができるようにするために平安時代，室町時代，現代の食事を提示し，年代順に並べ替えるクイズを行った。

実感Ｂを促す手立て：学んだことを体験してみる水墨画体験活動
目指す姿：学んだことを実体験することで，その難しさや凄さを理解する姿
　学んだことや興味をもったことを体験的に理解できるようにするために，習字道具を用いて水墨画体験を行った。

実感Ｃを促す手立て：現在の食事の写真提示と共通点を問う発問
目指す姿：室町時代と現在の旅館の食事の写真を提示することで繋がりを実感する姿
　室町時代と現在の繋がりを実感できるようにするために，両者の食事を写真で提示して比較させた。

（２） 実践４の結果と課題

結果：実感 A…28 名　実感 B…30 名　実感 C…29 名⇒「実感を伴った理解」ができた児童…27 名
「実感を伴った理解」ができた児童のうち 26 名が「社会科が楽しい」と回答


10月　3日

自分なりの問題を見つけたり疑問をもったりして、主体的に学習に取り組んだ
1取り組んだ　2まあまあ　3あまり　4取り組めなかった

問題や疑問に対して、自分で方法(教科書資料集タブレット)を選択して調べ答えを探すことができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった

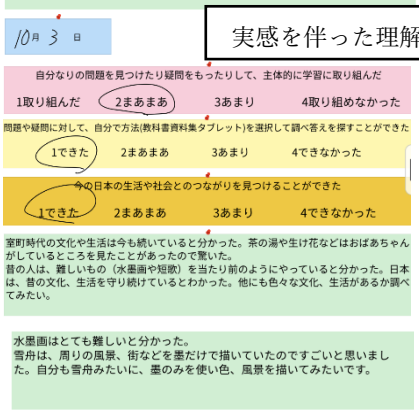
今の日本の生活や社会とのつながりを見つけることができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった

僕は、室町時代の文化や生活は、現代と似ているものがたくさんあるなあと思いました。例えば、書院づくりと和室とか、茶の湯です。だけど、水墨画は、すみだけでやると考えるととても難しそうだなあと思いました。なので、次の時間で、水墨画にチャレンジするのが楽しみです。びっくりしたことは、生け花の時に着るハサミは、この時代にあったんだなあとびっくりしました。

僕は、水墨画はとても難しかったです。だから、雪舟は街や風景をとても上手にかけているのでとてもすごいなあと思いました。その時代には、墨があったんだなあと思いました。雪舟は、どんな紙に水墨画を描いていたのかが気になります。

実感を伴った理解ができた児童①の振り返りから　※実践３と同一児童

児童①は実践３でも実感を伴った理解が得られた児童である。実感 A については，実践３とクイズの出し方を変えて，食事の写真を見て年代順に並び替えるクイズにした。タブレットでの操作を交えながら隣の友達と「品数が多いから…」などと意見交換をしながら取り組んでいた。実感 C についても，室町時代と現代の旅館の食事を比較したときに，「なんか似てるね」「今とそんなに変りないじゃん」などと発言し，「服や住まいはどんな感じだったのかな」と問いをもつことができた。


10月　3日

自分なりの問題を見つけたり疑問をもったりして、主体的に学習に取り組んだ
1取り組んだ　2まあまあ　3あまり　4取り組めなかった

問題や疑問に対して、自分で方法(教科書資料集タブレット)を選択して調べ答えを探すことができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった

今の日本の生活や社会とのつながりを見つけることができた
1できた　2まあまあ　3あまり　4できなかった

室町時代の文化や生活は今も続いていると分かった。茶の湯や生け花などはおばあちゃんがしているところを見たことがあったので驚いた。
昔の人は、難しいもの（水墨画や短歌）を当たり前のようにやっていると分かった。日本は、昔の文化、生活を守り続けているとわかった。他にも色々な文化、生活があるか調べてみたい。

水墨画はとても難しいと分かった。
雪舟は、周りの風景、街などを墨だけで描いていたのですごいと思いました。自分も雪舟みたいに、墨のみを使い色、風景を描いてみたいです。

実感を伴った理解ができなかった児童②の振り返りから　※実践３と同一児童

実践３では実感 A と C が不足した児童である。実践４では実感 A も C も得ることができ，実感を伴った理解ができた。その要因として，大きさのようなイメージするクイズではなく，資料を基に考える並べ替えクイズにしたことで効果的に働き，興味をもつことができたのではないかと考える。クイズを行いながら，隣の友達に「絶対こっちが今の食事だよ」「どう思う？」などと意見交換をしながら関心を高めている様子が見られた。実感 C についても，導入で関心を高められていたことから，食事の写真を比較しながら，「服や家も今と似ているのかな」などと呟いていた。導入で高めた関心が今との繋がりを調べるための探究心に繋がっていた姿である。

５　検証結果

「実感を伴った理解」ができた児童の多くは，社会科の学習を楽しいと感じるようになる。

６　成果と課題

５年生での実践をもとに，６年生の歴史的分野での実践を行った。すべての実践で，「実感を伴った理解」を促すための手立てを講じた結果，社会科を楽しいと答える児童が４割弱から８割強まで増えた。これは成果と言える。また，実践を重ねるにつれて「実感を伴った理解」の中でも，実感 A(主体的な問題解決を通して得られる理解)を得ることが一番困難であることも分かった。どの実践でも実感 A が不足する児童が多いことから，興味関心を高め，主体的に問題を解決していくための手立てを，これからも考えていきたい。そうすることで，実感 B や C にも繋がってくるのではないかと考える。

しかし，今回の研究で「実感を伴った理解」ができているにも関わらず社会科の学習を楽しくないと感じている児童も複数いることが分かった。この原因については不明確で，今回の研究では確かめられていない。これからも継続して研究を進めていく中で，社会科の学習が楽しいと感じられるようにするための方法や手立てを考えていく必要がある。

〈参考文献〉

・佐々木潤　『個別最適な学び×協働的な学び×ICT 入門』　明治図書，2022.12
・ネットワーク編集委員会　編　『「個別最適な学びと協働的な学び」を考える』　学事出版，2023.8
・佐野陽平　『気付き・問い・対話を引き出す　小学校社会「見える化」授業術』　明治図書，2023.7